

Title	第二言語としてのハワイ語使用に関する会話研究 : 母語話者カテゴリー-Mānaleo をめぐるやりとり
Author(s)	古川, 敏明
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2019, 2018, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72758
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

第二言語としてのハワイ語使用に関する会話研究： 母語話者カテゴリーMānaleo をめぐるやりとり

古川 敏明

1. はじめに

会話研究は主に英語や日本語など世界的に見て話者数の多い大言語を対象として発展してきた。近年、英語などに限定されない多言語使用や第二言語使用を分析対象とすることで、会話研究への貢献を目指す動きがある。本稿はアメリカ、ハワイ州で話され、話者数としては2万人程度のハワイ語共同体に着目し、会話分析における連鎖分析とカテゴリー分析の観点から、多言語話者としてのハワイ語使用者による母語話者概念をめぐるやりとりについて論じる。

ハワイ語はオーストロネシア語族ポリネシア諸語に属する言語である。消滅の危機に瀕した言語であるが、同じくポリネシア諸語のマオリ語と同様、言語再活性化の成功例としても知られている。ハワイでは複数の首長が統治する時代を経て、王国建国 (1810 年)、王国転覆と共和国の成立 (1893 年)、アメリカへの併合 (1898 年)、アメリカの 50 番目の州になる (1959 年) という統治形態の変遷があった。19 世紀末にはハワイ語が教育言語として禁じられ、ハワイ語を教育言語とする学校や話者の減少があったが、1960 年代から 1970 年代にかけて公民権運動の影響を受け、ハワイでも先住民の言語と文化の復興運動が熱を帯びた。1980 年代には就学前児童をハワイ語で教育するプーナナ・レオと公教育の一部としてカイアプニ・ハワイが設立され、現在では大学院の博士課程までハワイ語を教育言語として学べる制度が整っている。

また、現在では、1980 年代にハワイ語で教育を受け、いわば新たな母語話者となった最初の世代が 30 代の親世代となり、次世代への言語継承は新たな段階を迎えている。ハワイ州の統計 (DBEDT, 2016) によると、家庭でハワイ語を話すと回答した人の数は約 2 万人である。年配の母語話者は多くても数十人であると推定されるので、ハワイ語話者のほとんどがハワイ語を教育言語として学ぶ (学んだ) 若年層から 30 代までを中心とする新たな母語話者に加え、科目としてハワイ語を学習した様々な年代の第二言語使用者で構成されていると考えられる。

本稿が分析対象とするハワイ語ラジオ番組カ・レオ・ハワイ (Ka Leo Hawai'i, 以下 KLH) は 1972 年に開始され、オアフ島ホノルルのラジオ局 KCCN で放送されていた。第 1 期は 1972 年から 1989 年まで 417 回放送された。再活性化運動の中心人物のひとりであり、当時まだ 20 代の若者だった Larry Kimura を主たるパーソナリティーとして、年配の母語話者をゲストとして招き、インタビューを行うという番組構成だった (古川, 2015)。これらはデジタル化され、ハワイ大学やビショップ博物館アーカイブスに保管され、貴重な資料・教材としてハワイ語学習に利用され、言語の再活性化に大きな影響を与えてきた。

KLH の第 2 期は 1990 年から 2000 年まで 383 回放送された。主たるパーソナリティーは Puakea Nogelmeier で、多人数で賑やかに会話をするというのが第 1 期との相違点になっている。ゲストに迎えられる年配の母語話者が少なくなったことが番組構成に影響を与えたと考えられる。また、第 2 期は第 1 期以上に番組スタッフもゲストも第二言語使用者が中心となった。3 節で述べるように、本稿で検証するデータは第 2 期の放送回であり、以下では第二言語としてのハワイ語を用いる参与者たちによるカテゴリー化について論じる。

2. 理論的枠組み

会話分析研究において連鎖分析とカテゴリー分析は車の両輪のようなものである。本稿が用いる成員性カテゴリー分析 (MCA) は、カテゴリーとそれに付随する属性を相互照応するものとして、会話の参加者の *emic* な視点から概念化することを通し、相互行為におけるトークのメカニズムを明らかにするとともに、微視的な観点から社会関係や社会構造への洞察を得ることを可能にする分析ツールである。カテゴリー化分析は、会話分析の創始者のひとり Sacks (1979) が先鞭をつけ、エスノメソドロジスト Hester & Eglin (1997) などにより展開されて行ったが、狭義の会話分析にとどまらないように見える MCA の議論の展開については論争を生むこともあった。しかし、カテゴリー分析は連鎖分析と同時並行的に実践されるべきという点で見解の一致を見つつ (e.g., Hester & Hester, 2012; Stokoe, 2012a, b)、新たな成果が継続的に発表されている (e.g., Fitzgerald & Housley (Eds.), 2015)。

また、MCA は第二言語や (英語に限定されない) 多言語なコミュニケーションへの応用の可能性が示唆され (Kasper, 2009)、一連の研究成果を生み出してきた。本稿と関わりが深いのは、とりわけ対をなす母語話者 (NS) と非母語話者 (NNS) というカテゴリーをめぐるやりとりを分析した論考である。例えば、Gafaranga (2001) はフランス語とルワンダ語、Cashman (2005) は英語とスペイン語の二言語会話を分析し、両者はともに言語の選好を成員性カテゴリー装置 (MCD) とみなし、言語の選好と結びついた話者交代や修復の組織化を通じて、参加者が「有能な二言語使用者」などのアイデンティティを構築していると論じている。同様に、Kasper (2004) は外国語としてのドイツ語学習者とドイツ語母語話者の会話において、学習者がドイツ語から英語へ言語を切り替えることで発話上の問題を示唆し、ドイツ語での言語形式を要求すると、後続するターンで母語話者が要求された言語形式を提示するという修復の連鎖を観察している。重要なのは、相互行為への参加の仕方 (特に修復の連鎖) を通して、学習の目標言語 (TL) の *novice* (初心者) と *expert* (熟達者) のカテゴリーが参加者たちのやりとりにおいて関連性を獲得するという点である。すなわち、母語話者と非母語話者の間の非対称性は所与の制約ではなく、相互行為を進展させる資源であり、交渉可能なものである (Park, 2007)。

一方、ハワイ語の教育研究では、教科書、辞書、物語などの資料の収集・構築のように、言語の再活性化に直接的に貢献することが喫緊の課題として求められてきた。しかし、現在では再活性化を下支えする社会基盤が強固になり、学校制度が拡充し、音声・文字資料ともに様々な資料が共同体はもちろん共同体の外へも公開が進んだことで、ハワイ語の教育研究はより一層の発展を見せている。その中でハワイ語の会話研究はまだ限定的ではあるが、Saft (2017a, b) はインターネットで配信・公開されているニュース番組や年配者のインタビューデータを用い、ハワイ語の人称代名詞を MCD とみなしてカテゴリー分析を行なっている。また、Furukawa (forthcoming) はハワイ語ラジオ番組 KLH 第 1 期の番組内における地名と成員性をめぐるやりとりを分析するなど、徐々にその成果が発表されつつある。

本稿はメディアにおける多言語使用と MCA 研究の流れの中に位置付けられる。以下では、(おそらく番組スタッフとゲストのほとんどが第二言語話者であるため) これまで研究対象とされてこなかったハワイ語ラジオ番組 KLH 第 2 期における会話を分析する。特に、ハワイ語使用者にとって相互行為上の資源である母語話者カテゴリー *mānaleo* 「マーナレオ」をめぐるやりとりを分析することを通し、危機言語であるハワイ語の世界における母語話者観、つまり成員性カテ

リーmānaleoとその属性、mānaleoと対をなすカテゴリーとその属性、さらにこれらの資源がどのように動員され、何が達成されているのか、という点を明らかにしたい。

3. 方法

本節ではデータ収集とデータ分析の方法について述べる。本稿が一部を構成する研究プロジェクトではハワイ語ラジオ番組 KLH の第 1 期と第 2 期を対象に文字起こしを進めている。本稿で分析対象とするデータは、第 2 期の初回放送分になる HV24.418 (約 60 分、1991 年 2 月 3 日放送) の音声ファイルである。KLH 第 2 期の全放送回の音声ファイルはハワイ大学のオープンアクセスリポジトリ eVols で公開されている。eVols よりダウンロードしたファイルを研究協力者が文字起こしした後、著者が分析の焦点となる箇所について詳細なトランスクリプトを作成した。

HV24.418 の参加者は、番組パーソナリティーの Puakea Nogelmeier、その他数名とハワイ大学の学生たちである。番組冒頭ではこれらの番組スタッフたちが多人数会話を展開し、その後、電話をかけてきたリスナーとも話をするという構成になっている。第 1 期では主に年配の母語話者をゲストとして迎え、じっくり話を聴くという番組構成だったのとは対照的である。

本稿で分析の焦点とする mānaleo は母語話者を意味するハワイ語である。学習と研究に広く利用されているプクイ&エルバートの『ハワイ語辞書』によると、言語再活性化の機運が高まっていた 1970 年代後半に新たに生み出された、Native speaker を指す造語だと説明されている。特にこの造語の作成者として言及されている Larry Kimura と William H. Wilson は、KLH 第 1 期の中心人物で、番組パーソナリティーを務めていた。mānaleo は leo と māna からなり、leo は「声」、māna は (子どもを育てた人から子どもが獲得したと考えられている)「特徴」という意味である。いわば「声の面で継承した特徴」というのが字義通りの意味で、Native speaker (母語話者) を指す語として想定されている。

次節では mānaleo がどのような連鎖上の位置に登場し、どのようなカテゴリーの産出に関わっているか分析する。

4. 分析と考察

以下の抜粋では最上段に実際のやりとりを配置し、その下に逐語訳などの注釈、場合によってはさらにその下に全体の訳文を示すことで、各発話を 2-3 段で構成している。また、抜粋の左隅に矢印を付し、各抜粋で着目すべき発話箇所を示す。

最初の抜粋は番組パーソナリティー (PN) と電話をかけてきたこの日 3 人目のリスナー (T3) とのやりとりである。T3 は番組に電話をかけてきた理由に言及し始め(1、3 行目)、その後、理由を特定している (4、5 行目)。理由としては「このようなこと」(5 行目“kēia ‘ano m(h)e(h)a”) をすることが初めてだったからと述べている。「このようなこと」とは 3 行目で自ら言及した (ラジオ番組にリスナーとして) 電話をかける(“kāhea”)ことを指している。T3 は 4 行目で「初めて」(“mua”) だと強調し、5 行目で「このようなこと」(“kēia ‘ano m(h)e(h)a”) の最後の語を笑いながら発話することによって、初めて番組に電話をかけた自らの行為を説明が必要な行為として扱っている。PN が発話を高い音調で行うことで、T3 の発話に関心を示しつつ、ここまでの説明の真偽を確認すると (6 行目 “↑‘o i[a]”), T3 の発話と一部重複するが(7 行目)、直後に T3 は PN からの確認に対し肯定的な応答を行なっている (7 行目“a:e”)。T3 は発話を継続

し、「このようなこと」をした理由について再び説明し始める。以下では特に T3 による説明で動員されるカテゴリーに着目したい。

抜粋 1

001	T3	.h a[kā u]a ua makemake wau but Perf Perf want I
002	PN	[u]
003	T3	e kāhea iā 'oukou no ka mea to call to you.3+ because
004	T3	'o kēia ko'u maka <u>mua</u> Top this my end first
005	T3	(e) hana ai i kēia 'ano m(h)e(h)a. to work Res Obj this kind thing 'but I wanted to call you because this is my first time
006	PN	to do this kind of thing.' ↑ 'o i[a] Top it
007	T3	'Is that so?'
→ 008	T3	[a] 'a:e. a makemake e a, uh yes uh want to uh
→ 009	T3	makemake wau e (.5) e: (.6) e 'ōlelo want I to to to speak i nā mānaleo e (.5) a i, (>you know<) to the NS uh
→ 010	T3	'uh yes uh I wanted to speak to the Native Speakers uh you know'
011	PN	inā hiki iā lākou ke kāhea iā 'oukou. if can to they Pcl call to you3+ 'If they can call you'
→ 012	T3	[a:] oh
→ 013	T3	[i] hiki iā mākou so that can to we.3+.exc
→ 014	T3	ke (.4) ke a'o. (.6) a: ke: a: the the learn uh the uh ke ho'olohe iā (.) iā lākou. the listen to to them
015	PN	'so that we can learn (from) and listen to them' 'o ia ho['i: that's right 'that's right.'

T3 は 7 行目で開始した自らの願望に関する発話 (“a makemake e a”) を 8 行目で自己修復して再開し (“makemake wau e”)、「このようなこと」をした理由を説明し始める。発話の再開と自己修復、比較的長い間、音の引き伸ばし、さらに別の長い間(8 行目)に示されているように、T3 は語検索をした後、「mānaleo たちと話す」(8-9 行目“e 'ōlelo i nā mānaleo”) ことがしたかったという発話を完成させている。しかし、T3 はその後も、間、言い淀み、言語の切り替え (9 行目) でターンを保持して説明を続け、もし mānaleo たちが PN たちに電話をしてきたらと仮定

の状況を述べている (10 行目“inā hiki iā lākou ke kāhea iā ‘oukou”)。すると、PN が認識状態の変化を示す発話を行い (11 行目“[a:]”)、T3 の説明について理解が進んだことを示している。T3 は説明を継続し、上述の状況が生じれば、(聞き手である PN を除く)「私たち」(12 行目“mākou”)は「学ぶ」(13 行目“a‘o”) ができると言い澁みや間を挟みつつ述べていく。ここで T3 は可能表現の一部である ke に後続する動詞の語検索を行なっている (12-13 行目“[i] hiki iā mākou ke (.4) ke a‘o. (.6) a: ke: a:”)。そして、「学ぶ」を「聴く」(14 行目“ho‘olohe”)に置換する自己修復を行い、「彼/彼女たち」(14 行目“lākou”) (つまり mānaleo たち) を聴くことができると述べている (14 行目“ke ho‘olohe iā (.i) iā lākou”)。それに対し、PN が同意を示している (15 行目“‘o ia ho‘i:”)。

T3 の発話に登場するのは、(リスナーである) 自分 (1、8 行目“wau”「私」)、PN を含む番組スタッフたち (3、10 行目“oukou”「あなたたち 3 人以上」)、mānaleo たち (9 行目“nā mānaleo”、10、14 行目は人称代名詞 lākou 「彼/彼女たち 3 人以上」)、そして自分を含むが PN を除外する自分たち (12 行目“mākou”「私たち 3 人以上」) である。ここで T3 によるカテゴリー化に着目すると、T3 は「私たち」を mānaleo たちから「学ぶ」ことができ、また、「聴く」こと(で「学ぶ」こと)ができる人物と位置付けている。それと同時に、T3 は mānaleo たちを「私たちに」「教える」ことができ、また、(「学ぶ」に値することを話してくれるから)「聴く」に値する人物と位置付けている。つまり、mānaleo というカテゴリーをハワイ語のエキスパートとして、それに付随する属性とともに構築する一方で、自分を含む「私たち」をハワイ語の第二言語話者・学習者として構築している。これに関連して、T3 は最初は (なぜ番組に電話をかけてきたのかという) 自分個人 (“wau”「私」) の願望を説明しているのだが、12 行目で“mākou”「私たち 3 人以上」へと人称代名詞の切り替えを行なっている。ハワイ語では複数を表す一人称代名詞 (私たち) について、聞き手を含む (“kākou”「私たち 3 人以上」) か聞き手を含まない (“mākou”「私たち 3 人以上」) か区別する。T3 は mākou を用いて、「私たち」から PN (とおそらく番組スタッフ) を除外し、PN たちを (mānaleo ではないが番組をハワイ語で運営するほど) ハワイ語に熟達した者として扱っている。PN は 15 行目で同意しているので、mānaleo をめぐる T3 による一連の発話とカテゴリー化は PN も含めて協働的に構築されている。

次に、後続する発話でさらに mānaleo をめぐるやりとりとカテゴリー化を見ていこう。抜粋 2 の 15 行目は抜粋 1 と同一の発話である。PN による同意の後、T3 は先行する発話内容 (mānaleo が電話をかけてきたら、発話を聴くことができる) に関する理由を追加し始める (16 行目“no ka mea”)。間、音の引き伸ばし、さらなる間、言い澁み (16 行目“(4) a: (.6) no-”) の後、T3 は自分たち(18 行目“mākou”「私たち」)の知識は年配者たち (17 行目“nā kūpuna”) から継承したものだ と述べている (17-18 行目“a mai nā kūpuna mai ko mākou na‘auao”)。短い間を挟み、PN が同意をしている (20 行目)。PN は発話を継続し、言語の切り替えと短い間の後 (21 行目“and (.3)”)、年配者たちから継承する知識は、現在では (年配者たちからの) 贈り物であると述べている (21 行目“‘o ia kekahi makana o kēia lā”)。この直後の PN によるカテゴリー化 (22 行目) に注目したい。

抜粋 2

015	PN	‘o ia ho[‘i: that’s right
016	T3	[no ka mea (.4) a: (.6) no- because uh
→ 017	T3	a mai nā kūpuna mai uh from the elders Dir

→ 018 T3 ko mākou na'auao.
Pos we.3+.exc knowledge
"our knowledge is uh from the elders."

019 (.3)

020 PN 'o ia ho'i
that's right

→ 021 PN and (.3) 'o ia kekahi makana o kēia lā
Top it one gift of this day
'that's right and it is a gift of today.'

→ 022 PN ua nui a mai[ka'i] ka po'e kupuna
mānaleo,
Perf big and good the people elder NS

023 T3 'the elderly Native Speakers have become
important.'

['a:e.]
 yes

年配者からの知識は贈り物だと述べた後 (21 行目)、PN が「重要になった」(22 行目“ua nui a mai[ka'i]”) と述べている途中で、T3 が重複しつつ強く同意している (23 行目“['a:e.]”)。PN は発話を継続し、重要になったという意味の述部の主語として、ある種の人々 (22 行目“ka po'e”) を用いているが、この人々には修飾語が 2 つ後続していることに注意したい (“ka po'e kupuna mānaleo”)。つまり、ハワイ語の母語話者 (mānaleo) で、且つ年配者 (kupuna) でもある人々 (ka po'e) というカテゴリーが創出されていることがわかる。番組放送時点でハワイ先住民の年配者の数は多くはなく、mānaleo でもある人はさらに少ないことを考慮すると、PN は T3 の発話を再定式化することにより、ka po'e kupuna mānaleo が希少な存在であり、知識や伝統の継承において mānaleo である年配者の重要性が増していることを強調している。

PN のカテゴリー化は、それに先行する T3 による発話を再定式化していると分析できるが、17 行目で T3 は年配者 (“kūpuna”) というカテゴリーを導入していた。年配者に言及した直後に、T3 は抜粋 1 で見たように聞き手である PN を除外した「私たち」(18 行目“mākou”) に言及している。T3 はカテゴリーとそれに付随する属性に言及することで、年配者は知識を与える者、「私たち」はその知識を継承する者であるというカテゴリー化を行い、両者を対比することを通して、自分が番組に電話をしてきた理由を説明しているのである。ただし、この番組のスタッフやリスナーにとって、T3 が説明した自分自身の動機は新情報として受け止められていたが (PN が認識状態の変化を示した抜粋 1 の 11 行目“[a:]”), T3 による年配者や mānaleo に関する説明自体は新情報とはいえない。T3 による説明、さらに PN による再定式化は、リスナーを含む番組の参加者やさらにはハワイ語の共同体が持つ価値観 (年配者への賞賛と感謝) を確認して構成員間の結束を高めるやりとりだと考えられる。

抜粋 1 では mānaleo と (T3 が“mākou”「私たち」と呼ぶ) ハワイ語の学習途上にある者というカテゴリー対比が行われていた。同様に、抜粋 2 では年配者 (“kūpuna”) と (やはり T3 が“mākou”「私たち」と呼ぶ) 知識の継承途上にある者の対比が観察されるとともに、PN によって mānaleo と年配者が結合されたより希少な存在 (“ka po'e kupuna mānaleo”) を産出するカテゴリー化を通し、危機言語としてのハワイ語共同体内における価値観の共有と強化が行われていた。

mānaleo をめぐるカテゴリー化をさらに検証するために、最後に抜粋 3 を見てみよう。抜粋 2 から約 2 分後の T3 と PN のやりとりである。T3 は翌週に予定されているハワイ語を話す催し

に言及し、そこでこの番組のスタッフにも会うかもしれないこと、そして催しに来るように“nā a ‘ōlelo Hawai‘i”に宣伝したことを説明する。“nā a ‘ōlelo Hawai‘i”自体は非文法的な表現だが、T3が自分で言い直したり、PNが聞き返したりすることもない。(おそらく、T3が誰かを催しに誘ったことが明らかで、そして複数の名詞を表す冠詞 nā が使われていることから、誘ったのはハワイ語 (“‘ōlelo Hawai‘i”) を話す人たちだと推察可能な状況だからだろう。) そこで14行目のT3の発話となる。T3は逆接の接続詞 (“akā”) で発話を開始することで、宣伝した相手が来場するかはわからないが、何れにせよ宣伝はしたということを示唆している。

抜粋3

- 014 T3 akā (.4) ua ua (.6) ua paipai wau iā lākou.
but Perf Perf Perf applaud I to them
'but I encouraged them.'
- 015 (.)
 016 PN [maika'i.]
good
- 017 T3 [nā māna]leo e hele mai. °a°
the NS to go Dir and
- 018 (.5)
 → 019 T3 kōkua mai iā mā(h)[kou.
help Dir Obj we.3+.exc
'(I encouraged) the NSs to come and help us.'
- 020 PN
[maika'i:, (.3)
good
- 021 PN no ka mea:, (.) mahalo nui (.) ho'i kākou.
because thank big just
- 022 PN we.3+.inc
- 023 PN (.) ke hele mai
if go Dir
- 024 T3 ka po'e kū[puna ka po]'e mānaleo e
the people elder the people NS Pcl
'because we truly thank if the elders, the NSs come.'
- 025 PN
['a::e.]
yes
- 026 T3 .h (.) he makana kēlā no kākou pākahi.
a gift that for we.3+.inc
- 027 PN *individually*
'that is a gift for us.'
- 028 T3 'ae.
yes
'e[ā?]
isn't that so?
['a:e] 'ae .h
yes yes

間、言い淀みによる繰り返し、さらなる間 (14行目“(4) ua ua (.6)”) の後、T3は発話を再開し、先行する発話で誘った相手 (14行目“lākou”「彼/彼女たち」) にとにかく来るように働きかけたと述べている (14行目“ua paipai wau iā lākou”)。それに対し、PNは肯定的な評価をしている (16行目“[maika'i.]”)。この発話は、フロアを保持していたT3と重複するのだが、T3は先行す

る発話中の人称代名詞 *lākou* 「彼/彼女たち」を自己修復して *mānaleo* と言い直し、*mānaleo* たちに来るように働きかけたのだと述べている (17 行目 “[*nā māna*]leo e hele mai.”)。T3 はさらに発話を継続することを示唆してフロアを保持し (17 行目 “*ʻaʻoʻ*”), 比較的長い間 (18 行目) を挟み、笑いを含む声で自分たち (“*mākou*” 「私たち」) を手伝いに来てくれるようにも働きかけたと述べている (19 行目 “*kōkua mai iā mā(h)kou*”).

この T3 による発話の最後の部分と重複しつつ、PN は再び肯定的な評価を行い (20 行目 “*maikaʻi;*”), 継続イントネーションで発話を継続することを投射し、短い間の後、T3 の行為を肯定的に評価した理由を説明し始める (21 行目 “*no ka mea;*”). 理由としては、年配者 (23 行目 “*ka poʻe kūpuna*”) と *mānaleo* (23 行目 “*ka poʻe mānaleo*”) を並置し、これらのカテゴリーに該当する人たちが来れば、「私たち」(21 行目 “*kākou*”) は非常に感謝するからだと述べている (21-23 行目 “*mahalo nui (.) hoʻi kākou. (.) ke hele mai ka poʻe kūpuna ka poʻe mānaleo*”). PN の説明が明らかになった位置で、発話を重複させつつも、T3 は音の引き延ばしと下降イントネーションによって強い同意を示している (24 行目 “*a::e.*”). PN は発話を継続し、吸気と最小の間 (25 行目 “*.h (.)*”) を挟んで、抜粋 2 の 21 行目と同様、贈り物 (“*makana*”) という比喻を用いて、年配者たちと *mānaleo* たちを指示語「あれ」 (“*kēlā*”) で参照しつつ、「私たち」 (“*kākou*”) 一人一人にとって贈り物だと述べている (25 行目 “*he makana kēlā no kākou pākahi*”). T3 が再び同意 (26 行目 “*ae.*”) した直後に、PN が同意を求めると (27 行目 “*e[ā?]*”), その発話と重複しつつ T3 が改めて同意を繰り返している (28 行目 “[*ʻa:e*] ‘ae”). つまり、*mānaleo* と年配者を「贈り物」に例える PN の発話は、T3 から繰り返し強い同意を得ていて、T3 からすでに同意を得ているにもかかわらず PN はさらなる同意を T3 に求めているのである。

T3 と PN が複数を表す異なる人称代名詞を用いている点も興味深い。T3 は他の抜粋で観察したように、19 行目でも *mākou* を用いて「私たち」から PN (と番組スタッフ) を除外しているのだが、逆に PN は *kākou* を用いて、催しに年配者や *mānaleo* たちが来てくれたら感謝をする「私たち」(21 行目) にも、「贈り物」を享受する「私たち」(25 行目) にも聞き手である T3 を含んでいる。異なる人称代名詞を用いているが、T3 と PN はともに「私たち」を年配者や *mānaleo* たちと対比的な存在として位置付けている点で共通している。

ここまでの観察をまとめると、抜粋 1 では T3 が自分を含む第二言語話者と *mānaleo* を対比していた。同様に、抜粋 2 では T3 が自分を含む知識の継承の途上にある者と年配者を対比するとともに、PN が *mānaleo* と年配者を結合して新たなカテゴリー (“*ka poʻe kupuna mānaleo*”) を創出していた。最後に抜粋 3 では、PN は年配者と *mānaleo* を関連性の高いカテゴリーとして並置しつつも、別々のカテゴリーとして提示していた (23 行目 “*ka poʻe kūpuna ka poʻe mānaleo*”).

5. おわりに

ハワイ語ラジオ番組 KLH 第 2 期から以上 3 つの抜粋のやりとりを分析することで、ハワイ語の共同体において、*mānaleo* と年配者は関連性の高い 2 つのカテゴリーであり、番組参加者たちがこれらを並置したり、ひとつのカテゴリーとして結合したりすることによって、番組スタッフやリスナーの多くを内包する第二言語話者や知識を継承する途上にある学習者というカテゴリーと対比的な位置付けをしていることを明らかにした。危機言語としてのハワイ語を再活性化しようという実践の共同体において、*mānaleo* は単に母語話者を指すのではなく、*kupuna* (年配者) と同様に知識と経験を有するが故に敬意の対象であるという属性を併せ持つ存在であり、だからこ

そ「贈り物」と形容されていた。本稿で分析対象としたハワイ語ラジオ番組 KLH 第 2 期 (1990–2000) は、主要なパーソナリティーを含め番組スタッフの大幅な入れ替わりを経た後も、第 1 期 (1972–1989 年) と同様、こうした価値観を共有・再確認する場として機能するとともに、共同体の結束を維持・強化していたと結論づけられる。

ただし、本稿では第 2 期の初回放送分を分析対象としただけなので、今回は未分析となった第 2 期からのデータについて改めて検証したい。また、1970 年代に登場した造語 *mānaleo* が第 1 期では用いられていたのか、類似カテゴリーがあるか、それらがどのように用いられていたのかという点も検討課題である。さらに、本稿はハワイ語における母語話者概念をめぐるやりとりに着目したが、先行研究で言及した諸言語や他の言語でのやりとりと比較することで、母語話者観 (あるいは熟達した言語使用者観) の対照研究へと広げていくこともできるだろう。

参考文献

- Cashman, H. R. (2005). Identities at play: language preference and group membership in bilingual talk in interaction. *Journal of Pragmatics*, 37, 301–315.
- DBEDT. (2016). Statistical report: Detailed languages spoken at home in the State of Hawaii. Hawaii State Data Center, Research and Economic Analysis Division, Department of Business, Economic Development and Tourism, State of Hawaii.
http://files.hawaii.gov/dbedt/census/acs/Report/Detailed_Language_March2016.pdf
- Fitzgerald, R. & Housley, W. (Eds.), (2015). *Advances in membership categorization analysis*. London: SAGE.
- 古川敏明. (2015). メディア実践を通じた言語再活性化: ハワイ語ラジオ番組カ・レオ・ハワイはどのような番組だったのか. *人間生活文化研究*, 25, 16–24.
- Furukawa, T. (forthcoming). Place and membership categorization in a Hawaiian language radio show. *Pragmatics and Society*.
- Gafaranga, J. (2001). Linguistic identities in talk-in-interaction: Order in bilingual conversation. *Journal of Pragmatics*, 33, 1901–1925.
- Hester, S. & Eglin, P. (1997). Membership categorization analysis: An introduction. In S. Hester & P. Eglin (Eds.), *Culture in action: Studies in membership categorization analysis* (pp. 1–23). Washington D. C.: University Press of America.
- Hester, S. & Hester, S. (2012). Categorical occasionality and transformation: Analyzing culture in action. *Human Studies*, 35, 563–581.
- Kasper, G. (2004). Participant orientations in German conversation-for-learning. *The Modern Language Journal*, 88, 551–567.
- Kasper, G. (2009). Categories, context, and comparison in conversation analysis. In H. Nguyen & G. Kasper (Eds.), *Talk-in-interaction: Multilingual perspectives* (pp. 1–28). Honolulu: National Foreign Language Resource Center, University of Hawai‘i.
- Park, J. (2007). Co-construction of nonnative speaker identity in cross-cultural interaction. *Applied Linguistics*, 28, 339–360.
- Sacks, H. (1979). Hotrodder: A Revolutionary Category. In G. Psathas (Ed.), *Everyday language: Studies in Ethnomethodology* (pp. 7–14). Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.

- Saft, S. (2017a). Documenting an endangered language: The inclusive first-person plural pronoun kākou as a resource for claiming ownership in Hawaiian. *Journal of Linguistic Anthropology*, 27, 92–113.
- Saft, S. (2017b). The discursive construction of identity in minority language media: The first person inclusive plural pronoun kākou as a membership category in Hawaiian video clips. *The Japanese Journal of Language in Society*, 20, 56–70.
- Stokoe, E. (2012a). Moving forward with membership categorization analysis: Methods for systematic analysis. *Discourse Studies*, 14, 277–303.
- Stokoe, E. (2012b). Categorical systematics. *Discourse Studies*, 14, 345–354.

ウェブサイト

eVols (ハワイ大学マノア校リポジトリ)

<https://evols.library.manoa.hawaii.edu>

Nā puke wehewehe ‘ōlelo Hawai‘i (ハワイ語オンライン辞書)

<http://wehewehe.org>

謝辞

本稿は科学研究費助成事業「ハワイ語ラジオ番組を事例とする危機言語の復活とメディア利用に関する会話分析的研究」(若手研究(B)課題番号 17K18078) の成果の一部であり、2018年5月に京都女子大学で行われた第2回 CAN-Asia Conference での口頭発表が元になっている。貴重なフィードバックをくださった学会参加者に感謝する。また、HV24.418の文字起こしを担当してくださった土肥麻衣子さんに御礼申し上げる。

略語一覧

Dir	directional
Obj	object marker
Pcl	particle
Perf	perfective (completive aspect)
Pos	possessive
Res	resumptive pronoun
Top	topical marker
we.3+.exc	exclusive “we” (three and more)
we.3+.inc	inclusive “we” (three and more)
you.3+	you (three and more)